

令和6年度第1回川崎市子ども・子育て会議 子ども・子育て支援推進部会 議事録

■ 開催日時

令和7年2月13日（木）午後6時00分～

■ 開催場所

来庁（本庁15階こども未来局会議室）及びオンライン会議

■ 出席者

（1）委員

公益財団法人川崎市生涯学習財団 理事長	石井 宏之氏
NPO 法人子育て支えあいネットワーク満 代表理事	河村 麻莉子氏
公募委員	塩見 郁美氏
川崎市青少年指導員連絡協議会 理事	山本 友彦氏
川崎市民生委員児童委員協議会 常任理事	横島 正志氏

（2）行政所管課・事務局

こども未来局総務部企画課課長	佐藤 園子
こども未来局総務部企画課担当係長	小島 健太郎
こども未来局総務部企画課担当係長	高瀬 博章
こども未来局総務部企画課職員	屋宜 美里
こども未来局総務部企画課職員	西川 遼
こども未来局保育・幼児教育部保育第1課担当課長	奈良田 剛志
こども未来局保育・幼児教育部保育第1課担当係長	横田 亜紀子

■ 配布資料

資料1 子ども・若者の”声”募集箱事業概要について

資料1-2 子ども・若者の”声”募集箱事業令和6年度実施状況報告書

資料2 かわさき子育てアプリについて

参考1 川崎市子ども・子育て会議教育・保育推進部会委員名簿

参考2 川崎市子ども・子育て会議教育・保育推進部会行政出席者名簿

参考3 川崎市子ども・子育て会議条例

■ 傍聴者

なし

1 開会

2 議事

※ 摘録につき「である」調で記載、敬称等省略しています。以下、ポイントを抜粋して記載。

議事 1 子ども・若者の声募集箱事業実施状況について

○ 資料 1、資料 1 - 2 をもとに事務局から説明。

< 質疑等 >

【河村委員】

資料の 11 ページに年齢別の声を寄せてくれた子どもたちが書かれており、令和 5 年度は小学 6 年生で、今年度は中学 3 年生の意見が増えている。令和 5 年度は中学 3 年生は少なかったが今年度はすごく増えているというのは何かあったのか。

【事務局】

各小学校、中学校については、学校長会等を通じて、本事業についての周知等をさせていただいている。各学校で総合学習、社会科の教育の一環として、授業の中で市政に関する取組の中で川崎市に自分たちの意見を上げてみようという取組が中学 3 年生で実施されている学校が多くなっている。そのため、今年度は中学 3 年生の投稿数が増えているような状況ということを実際に投稿いただいた中学の先生等に確認している状況。

【河村委員】

投稿している学校は限られているのか。

【事務局】

今年度の中学 3 年生については、5 校、6 校で大きく取り扱ってくださってやっていただいたという傾向。

【横島委員】

先ほどの報告の中にあった、子どもの意見を取り入れて市長が直接答えるというようなことがすごくいい取組だなと思った。やはり跳ね返ってくるものがないものであれば、また次にというように考えられると思うので、この取組はすごくいいなと思う。

【塩見委員】

こちらの取組は本当にいいものだなと思っているが、小学校 1・2・3 年生、低学年の方にはあまり周知しない予定か。

【事務局】

今、事業化しているものは、ちょうど小学校 4 年生が総合学習が始まる学年というところになっているため、そこをターゲットとさせていただいているような状況。

【塩見委員】

恐らくGIGA端末での総合の授業でやっているためと思うが、これは本当にいい内容なので、ぜひ1・2・3年生とかからもお手紙みたいな形でも何でもいいので、意見みたいなのが集められる機会があれば、よりいいなと感じた。

【山本委員】

横島委員の意見にもあったが、市長からのメッセージというのは非常にいいと思う。楽しみだなと思っている。

また、投稿されている数が多い区というのは中原、麻生、宮前であったが、投稿が多い理由として、広報を川崎市内大体同じように行って、これだけ投稿があったという数字なのか、何か特性があるか。

中原が多いというのは、人の住んでいる居住的にもいろいろ、中原というのは区外から多く越されてきているとか、様々あるのかもしれない。そういうのというのはあるのかなと気になった。

【事務局】

各川崎市立の中学、小学校に関しては、同じように案内をしているところだが、6ページに、今年度、私どものほうで市のイベントにおいて広報をさせていただいている。ホームページ等もアップ等しているが、さらに大きいイベントや夏休みのイベント、また、川崎市の市政日より、こういったものを活用して広報をさせていただき、そういったイベントに参加されている方がもしかしたら興味を持っていただいて投稿いただいている可能性があるのかなと思う。特段、中原区に力を入れてアピールするなど、そういったものはないような状況。

【山本委員】

中原は中心でもあるからいろんなイベント会場にもなりやすい傾向もあるためかとも思った。

【石井委員】

8、9ページの件数について、まだ始まったばかりということもあるが、市長への手紙では子どもからの意見が非常に少なかったという話があったが、令和5年度の通数は347、今年が今のところ307ということだが、この辺の件数の受け止め方としてはどうか。多いのか少ないのか。

今はどんどん応募してくださいということだろうが、少し感覚的な話になるが、件数的には、目指すべきところも含めて何かあるのか。

【事務局】

1か月当たり30件程度が平均という形にはなっている。ただ、令和7年1月は、幸高校が授業で活用いただいた関係で100件近い受付を受けているような状況で、今後も、こちらとしては、広く意見等を集めていきたいと考えているため、様々なイベント等での宣伝や、今後、動画メッセージ等も実施していく関係で市の公式Xなど、そういったものの

媒体も活用して、ポスター等だけではなく、子どもたちがより身近なツールを使って案内していきたくて考えているので、もう少し増えていけばいいかなというところ。

【石井委員】

以前聞いたかもしれないが、小学生が使っているG I G A端末からも入れるということか。

【事務局】

G I G A端のほうで投稿してくれる子どもたちが小中学生ではほとんど。「事業についてどこで知ったか」という設問でも、やはり学校からとか、G I G A端のお気に入りからとか。G I G A端末からすぐに入れるような形で教育委員会に協力してもらい、G I G A端末に設定してもらっているため、子どもたちにとっても非常に身近なものになっているのかなと考えている。

一方で、「子ども・若者の声」と言っているが、なかなか高校生からの投稿数が少ない状況であるため、特に今年度後半からは高校生からも投稿してもらえるように、どういった形で訴求していけばいいかというようなところも検討した中で、市立高校に対して働きかけをしたりというようなことも行っているため、数をどんどん増やしていくということ以上に、幅広い層への周知は今後もしていきたいと考えている。

【石井委員】

大変いい制度なので、まずは皆さんに知ってもらい気軽に投稿してもらって、声を上げていただくということが大事かなと思う。

もう1点、報告書の21ページの(6)で実際に反映した案件や取組を進めた案件について、これは非常に分かりやすくていいなと思ったが、一方で、23ページのフィードバックに関する6件の中でこういった意見がある。当初、導入の説明ときにやはりフィードバックが大事ですよ、声を出してくれた方にそれがどうなったかというのが見えるといいですよという話をした。なかなか案件的に難しい中で工夫してやっつけようという感じが、中には、例えば〇〇公園のトイレが汚いからきれいにしてほしい、というような結構具体的なものがあって、そういったものに対しての関係局へのアプローチの仕方やその対応の結果みたいなものが、システム的な意味合いで確立されているのか、漠然とした、抽象的な意見もあって、答えづらい意見提案は、取り組んでまいりますとか、検討してまいりますみたいな話にならざるを得ないと思うが、具体的なものに対して、局との関係性において、どういった取組をされているのか、もしくはされていくのか。予算やいろんな事業計画があるので、すぐに対応できないものもきっとあると思うが、そのあたりどうか。

【事務局】

意見については、本当に市長が全て読み、コメントとして1つ選んでその月のコメントを御自身で語っていただくというような形でやっているが、それ以外のものに関して、当然市長にも見ていただき、この公園がこういう状況なのかということの確認の指示

をいただき、各局のほうにそれを伝えたりということもおこなっており、基本的には全ての意見に対してそれぞれの局と連携しながら考え方をホームページのほうにアップするようにしているため、即時的に対応ができるものに関しては、こういった対応をしましたというようなことがお返しできている。なかなか予算の観点でかなわないようなものについては、その理由であったり、今後検討しますというような答えになってしまうこともあるが、基本的には全ての意見に対してホームページのほうで答えを返しているというようなやり方をしている。

【石井委員】

質問内容にもよるし、大変な部分があって工夫がされているなど感じているので、引き続き多くの声が集まるような形で取り組んでいただけたらと思う。

【河村委員】

「つぶやき」という言葉が、あなたのつぶやきを聞かせてということだったと思うんですけども、つぶやきはあまり返ってくることを期待しないかなと思っていて、意見を聞かせてというのと、つぶやきを聞かせてというのは結構違うなと思った。しかし、たくさん子どもたちが日常的に自分が思っていることをつぶやいてくれる、こういうツールにもしなっていくのだとしたら、1個1個全部に返すというのは本当にすごく大変なことなんじゃないかなという気もして、その方向性としてはどっちを目指していくのか。

【事務局】

そのあたりはまさに私たちも岐路に立っているところで、おかげさまで件数のほうは結構伸びてきており、広報の効果も出てきているというような部分もある。市長としてもこの仕組みは非常に大切にやっていきたいというところでどんどんバージョンアップさせていきたいと思いますというようなご意向があり、私たちも日々悩みながら進めているところがあるが、やはり河村委員がおっしゃったように、1件1件返して答えをつくっていくということをしよとすると、今後さらに件数が伸びていったときに現実的に対応ができるかというところは考えていけない課題になりつつあるなと思う。おっしゃっていただいたように、つぶやきというところと意見というところで、いただいた意見を全て市政にすぐに反映させるというところ、ダイレクトな、そういった効果を求められるのか、それとも、市と子どもたちとのコミュニケーションツールみたいな形でつながっているということが非常に価値があるというところに重きを置いておくのか、そのあたりは本当に今後の私たちの検討課題かなと思っている。

【横島委員】

局別でやっぱり教育委員会が一番多いということで、それは教育委員会に諮って教育委員会が答えを出して、それを企画課のほうでまとめるという形になっているのか。教育委員会が何かするというのではなくて、企画課のほうでそれを取りまとめて出していくという形なのか。

【事務局】

いただいた意見を振り分けて、それぞれ関係する局のほうに依頼をして一定の回答をつくっていただき、それを企画課で取りまとめ、ホームページのほうで公開していくというようなやり方をしている。

【横島委員】

大変と思う。学校関係のことはすごく幅広い。トイレや図書館の問題など、多岐にわたっている中で、教育委員会、学校もそうだが、どうやって改善していくかというような話になっていくと思う。先ほどのお話にもあったように、今後どうするかという意見を教育委員会の問題なのに教育委員会が答えないで企画課がそれをまとめるというのはどうなのか。

市長への手紙の事業は、全て各局に振り分けて、もしくは委員会に諮るような内容になっていたりということで、それぞれが1個ずつ解決していくような気がしていたが、この事業はこれだけの件数の中で、とりわけ教育委員会の事務部局のほうで件数がこれだけ多いということは、やっぱりそれだけ学校の中に問題があるという子どもたちの意思表示だと思うので、それは教育委員会で答えてほしいなという、教育委員会が答えたものをまとめているというのは分かるが、直接教育委員会が返事できないのかなという思いがある。

【事務局】

どうしてもやはり子どもたちの身近な場所は、学校であるというところで、学校関係の意見が来るというのは本当に自然なことなのかなと思っているが、一つ一つの回答や、少し難しい問題なども出てきた場合にも教育委員会とうまく連携しながら子どもたちに答えるのほうを返していければと思っているので、現状、企画課のほうで取りまとめ、最終的にホームページに載せる形に整えてアップするという作業はやらせていただいているが、緊急対応が必要な投稿があった場合など、教育委員会のほうにもかなり御協力いただいている。そういった面ではかなり動いていただいている。

【石井委員】

おそらく教育委員会でも意見を受け止めて、実際、対応できる案件は直接教育委員会内部で対応はされているんだと思う。回答の窓口がこども未来局になっているということ。ただ、そういう意味では、件数が増えれば増えるほど企画課の負担も非常に増えるというところで、対応窓口についての市の組織のあり方は次の問題としてあるのかなというところもある。

各委員からは大変よい取組、制度であると意見をいただいた。制度としてまだ発展途上だと思いう。いろいろ御苦勞もあるかと思うが、ぜひ引き続きよろしく願いをしたい。

議事2 子育てDXについて

○資料2をもとに事務局から説明。

<質疑等>

【河村委員】

保育園、学童保育などに対する支援はどうか。学童保育や一時預かり事業を実施している中で、なかなかそこをシステム化していくというのがすごく難しいと感じている。法律上ではよくなるが、実際にスタッフの時短になるかというところ、スタッフもデジタル化というところに結構疎いスタッフも多くおり、悩ましい。子育て業界は、おそらくそのシステム導入に積極的なスタッフがそんなにたくさんいるわけではないと感じており、そこは実際にどのような支援をされているのか。

あとは35ページの一時保育のシステムについて、本当に一時保育というところが求められているが、実際はすぐに預かってもらえるわけではなく、利用希望日の1か月ほど前に予約の電話でするために争奪戦みたいな形になってしまっているというところから、一時保育はもう諦めた、というようなお母さんたちもたくさんいて、さらに、登録まで行き着かないという保育園もたくさんあり、利用可能な保育園へ1件1件電話をかけていくうちに心が折れてしまったお母さんたちによく出会うので、システム化もそうだけれども、一時保育というところに保育園としてはあまり積極的ではないのかなという印象もあるので、そこも含めてこのシステムがかわさき子育てアプリに乗ると、実際に使いやすくなると本当にすごくいいなと思ったので、もう少し具体的にどのように進めていかれるイメージかが伺えればと思う。

【事務局】

まず、保育園全体に関するDXについて、現時点でも川崎市のホームページ経由で、マイナポータルで保育園のオンライン申請というのは受け付けてはいるので、そこへの誘導というところをまずはリニューアル後の子育てアプリでしっかりやっていくというところはある。国も明らかにしていないが、保育DXというのも国のほうで進めていて、保活からワンストップで手続きができるように、利用者側も、事業者側にとっても事務の効率化につながるような、そういう全国共通のシステムをつくろうと今国はやっているの、保育の部分に関しては、国のシステムができ次第、川崎の子育てアプリもそこにつながるようにしていく想定ではいる。

ただ、先行して国のほうで全国的につくっていくというところは、現状情報が入っていない。一時保育に関しては、もう川崎市独自で進めていこうということで、今回、一時保育のシステムに関しても予算要求して、来年度システム化してアプリにもつなごうということ考えた。

【事務局】

今回の一時保育のシステムの導入に当たって、35ページの資料の下段のほうに図が示されているが、従来、アナログ、電話やファクスなどで予約も含めて申込みをしていただいていたところだが、そういったところをシステム化し、保育園についても、予約や利用の申込みについて電話での対応、それにかかる人手、または一時保育についても私どもの市のほうから補助金のほうを支出しているの、その補助金申請に係る様々な集計、実績

報告、そういったものについてもかなり手作業でやっていただいていたというところがあり、事務的な負担感が結構高いということは以前から聞いており、そういったところをなるべく軽減をしたいというところ。利用者の方については、スマホを通して予約の申込みができるように空き情報などを園に問い合わせることなく画面で確認し、空いているところに申込みができる、そういった形を取れるように、そして、園としては、一々電話やファクスで予約の申込みなどを受け、空き状況を確認してお返事するなどの手戻りがなくなるように、または市に対してのそういった補助金の申請についても、やはり手でやっていると集計のミスなどが発生してしまい、また手戻りが生じてしまうケースもあったため、そういったものがシステムを通すことで事務的な負担が軽減され、本来やるべき保育のほうになるべく人手やエネルギーを割いて、よりよい保育サービスを提供できるということを目指していけるようにするための導入である。

また、先ほど一時保育の利用申込みに当たって、事前登録の話があったが、そちらについては、やはり初めてのお子様を預かるというのは、そのお子さんがどういった特性、例えばアレルギーの有無などを事前に確認をしないといけないので、やはり手続上、必ず事前に園に行っていただいて、園のほうでお子さんの様子を見させていただくとか、保護者さんからお話を聞かせていただくという、そういったことがお子さんを安全に保育するために大事な手続である。ただ、おっしゃったとおり、それをしたくても、電話をかけても締切りが過ぎてしまうとか、そういったことが発生していたため、その辺についても、今回、システムの導入によって各園の締切りを事前に確認した上で、スマホを通して事前登録の申込みなどができるような形を取りたいと思っているので、保育園にとっても利用者様にとってもより利便性が高まるような形を目指しているもの。

【河村委員】

一時保育について、年明けにちょうど申請時期があると思うが、お母さんたちが本当にいっぱい電話しないとけない。電話をしてもなかなか対応が厳しい園が多いということもあり、何年か近隣の保育園に電話をして、一時保育の申請はいつからか確認し、一覧にして情報提供していたという時期があった。本当にそこが保育園もすごく苦労されていると思うが、お母さんたちにとっては、いつが申請時期かというところと、非定型の週2、週3の保育の申請と、緊急一時預かりの申請というのは、一緒にやっている園もあれば、別々にやっているもあると思うが、そのあたりが分かりやすくなるのもっと身近に一時預かりを利用できるようになり、今のお話を聞いて、それが実現すると本当に今の一時預かりのイメージがすごく変わるのではないかと少し期待している。

【石井委員】

事務局からのお答えにもあったが、この制度導入によって、より利便性が高まる、利用者側、保育所側も負担軽減につながる、そんないい制度になればと思う。

【横島委員】

令和7年度中に100%を目指すとするが、妊娠の届出が月に1000件あって、実際に利用しているのが600件というように6割の利用者しかいないということを考えたときに、ス

マホやパソコンを必ずしも持っていない家庭というのもある。そういう人たちにこれを幾ら宣伝しても取り入れられない現実があるわけで、子どもには全部パソコンを持たせているわけだから、その妊産婦さんにも届出が出た時点でシステムの紹介と併せて端末の貸与など、そういうことはできないのかなと思ったが、どうか。

【事務局】

端末の貸与というところまでは想定していなかったが、確かに取り残されてしまう方が出ないように配慮すべきと思う。また、DXを進めていくとしても、デジタル化を進めていくべき部分と、そうではなく、やはり対面での機会というところを残していくべき部分もある。例えば妊娠届については、情報を事前にアプリなどで送っていただくということはしつつも、面談にはやっぱり来ていただいて、それぞれの妊婦さんの健康状況を保健師さんがしっかり把握できるような、そういった機会をなくさないように、デジタルの部分とアナログの部分というのは、やはりそこはどちらがいかというのによく精査して進めていく必要があると考えている。

【事務局】

資料の29ページは国の資料。さきほど横島委員がおっしゃった保育DXの令和7年度中に100%との記載については、国が1年半ほど前にはそう言っていたが、まだ全然進んでいないような状況もあるので、市のほうが先取りして今回予算要求も行っているというような状況である。

【横島委員】

デジタル庁が絡んでいるからこういうのはどんどん進めなくちゃというように思うのだろうが、いかがなものかという。

【石井委員】

今の29ページは国の資料ということで、これはまた国の動向や方向性を見極めながら対応していくということ。一方で、先進的に川崎市が取り組んでいる部分については先取りしてやるということで。順次進めていくというようなイメージでよいか。

【事務局】

その通り。

【山本委員】

それぞれリニューアル、新規機能の追加があったが、非常に楽しみに待っていましたという感じがあるが、私の娘もまさにこういうことを言っていたし、非常に期待をしているので、この予定どおり、来年度にこれができるという認識でいいか。

【事務局】

リニューアルは令和8年1月を予定している。

【塩見委員】

アプリについて、こちらは常態的な利用を目指すというふうにおっしゃっていたと思うが、内容を見て、本当にいいものだと思っている。特に出生連絡票などは出生後2週間以内に届け出なければならぬとか、そういった期限がある必要書類というのが幾つかあると思うが、今いろいろなお母さんがいて、御自身が出産直後で動けないというときに、こういったアプリを通して申請ができるというのはすごくいい、便利だなと思った。

アプリの内容について、母子手帳は紙のものだとやはり歯が生えたなどと記録する際に、いつだったか忘れてしまったりするのが、アプリでその場で登録できるというのも使いやすいと感じる。毎日そのアプリを触るということであれば、1歳ぐらいまで、お母さんたちは、お子さんがいつうんちしたとか、いつおっぱいをあげたとかというものを全部別のアプリや紙に記録していると思うが、それをアプリの中でもできるようにすれば、それこそ毎日触って日常的に記録していくという習慣に、使われやすく身近なアプリになっていくんじゃないかなと思った。

もう一点、一時保育の利用について、6年ほど前の話にはなるが、利用を实际させていただいている、私が利用していた園では、空き状況、一時保育、3種類ぐらいに分かれており、フルタイムではないが時短で仕事をしている人が週3まで一時保育として通えるもので、週3まではいかないが、週1か週2、定期的に仕事をされている方、あとはその合間でリフレッシュで月に1日ぐらいで利用されたいという3パターンに分かれていて、リフレッシュの方というと、最初のお仕事をされている方が予約を入れた隙間のところで空いていれば利用できるというような形であった。通常、利用前に慣らし保育があると思うが、慣らし保育はリフレッシュの枠で取ることになるので、仕事をしているという週3の一番優先的に予約が取れる枠であったとしても、慣らし保育の予約が取れずなかなか進められないというところで私も苦労したので、本当に空き状況が目で見えて分かるというのはすごく予定が立てやすくいいものだと思ったので、ぜひ早めの取組を期待している。

【事務局】

こちらのシステムの導入の予定について、一時保育システムをパッケージとして提供している事業者がいて、令和7年度に入ってから入札を行い、事業者と契約した後で、今度は川崎市の一時保育の制度にカスタマイズをしていただく、そのための作業期間みたいなものも少し設ける必要があるため、予定としては、こちらもやはり年明け、来年の令和8年の1月ぐらいから試験的に利用が開始できるような形を取って、次年度、令和8年度から今の実施園がこちらのシステムを利用していただくような形を計画している。

【河村委員】

パッケージというのはどういうイメージか。

【事務局】

一時保育システムの利用者がスマホで画面を見られるようになること、保育園が予約の申込みを受付すること、市に対して補助金の申請をすることなど、そういったものを一切

まとめてパッケージ化しているソフトみたいなものを提供している事業者がおり、入札した後、その事業者と契約して、川崎市版に少しカスタマイズをしていただき、それから利用開始という形で予定をしている。

【河村委員】

私たちの地域の保護者の人に毎年アンケートを取っているが、今年度、認可保育園の一時預かりが利用しやすくなるというところにとってもニーズがあると感じるとともに、認可保育園以外にも、例えば子育て支援センターで預かりができればいいというニーズや、こども誰でも通園制度の利用時間がもっと長くなればいいというような要望もあったが、お母さんたちとしては、本当にちょっとだけおばあちゃんに預けるように、少しだけ預けたいというニーズがすごくあると思う。こども誰でも通園制度もこちらのシステムにもし乗れるなら、そういう道もゆくゆくはあるといいなと感じた。

【事務局】

今回、市のほうで取り組もうとしている一時保育のシステムは、本来であれば国のほうで進めようとしている保育DXの中に入れてほしいと思い、市として要望をしていたところだが、国のほうとしても、一時保育事業については全ての自治体で実施しているわけではなく、一部の自治体で実施している制度であるため、今回はDXの対象にはなっていない。そういった状況にあり、市のほうでシステム化を進めているもの。

一方で、こども誰でも通園制度については、今年度、川崎市では試行的事業ということで45施設に実施していただいているが、令和8年度からは給付化されて全自治体で実施するという制度になっているため、国もこちらについては総合支援システムというものを開発しており、こちらの総合支援システムを使って、こども誰でも通園制度については、利用予約の申込みやキャンセルの手続きをしていただき、園のほうについては、それを通して予約の管理や実績報告などの請求を市へ出していただくことになるので、こども誰でも通園制度については申し訳ないが、別のシステムを使って管理するということが決まっているので、利用者様は2つのシステムを使い分けていただくことになる。大変申し訳ないが、先ほど申し上げたような事情で別々のシステムになっているので、御理解いただければと思う。

【石井委員】

なかなか国の制度と市が独自に先進的にやっている制度、そういった仕組みの中でちょっと分かりづらさが出てくるかもしれないが、そこは周知やカスタマイズなどを含めていろいろ利用者の声を幅広く聞きながら、より利便性の高いものにしていただければと思う。

資料の30ページに現在のアプリの利用状況や課題が記載されているが、本当にまさにそのとおりだなと。ニーズの高い機能（未実装）の部分などが1つアクティブな利用につながっていないのかなと私自身も実感するところで、それが34ページの新規、拡充でまさにそこがフォローされていくということで非常にいいと思っている。

川崎のイベントアプリがあり、川崎のイベントや行事がまとめて載っているが、イベン

ト情報を探しに行くのが非常に大変、自分で目的を持って探しに行かなければいけないというところがあって、こんなものがあつたんだというイベントがなかなか分かりづらい。今回はプッシュ通知の充実があるが、やはり必要な人に必要なものを、また、こんなのがあるということを知ってもらうことも非常に大事、それによりこれはちょっと行ってみようかしらと、そういうきっかけもあると思うので、やはり届くような仕組み、そこもぜひお願いしたい。必要な人に必要な通知が届いて、これは行かなきゃというような形で受け取れるような、そのようなリニューアルもしていただければと思う。

【河村委員】

イベント情報で思い出したが、まさに本当にそうだなと。かわさき子育てアプリができたときに、子育て情報誌を編集していたメンバーで検索したときに、区ごと、年齢別など細分化されていて、結局何を探しているのかよく分からなくなってしまい、少し違う地域だけでも行ってみたいイベントもあれば、本当に近くのこども文化センターでやっている小規模な事業など、近いし行ってみようみたいな、いろんな階層があるというか、参加のための階層と本当にたくさんあって、そこを編集する人の存在はやっぱりすごく大事なんだなとそのときに感じたが、せっかくイベントを告知するならば、そういう編集機能みたいなのも、それこそAIなどになってしまうかもしれないが、編集機能も含めて考えていったほうが良いと思う。今、私たちは子育て支援センターでやっているイベントをかわさき子育てアプリにアップする担当がいて、アップしてはいるが、それも一律で全部出てしまうので、もう少し強弱をつけられたらいいのかなと感じている。

【石井委員】

リニューアルに関しては、ぜひより使いやすいもの、分かりやすいものをお願いしたい。

3 閉会